書　評

Benson の 'Aphasia, Alexia, and Agraphia' について

佐　藤　　捷

Benson, D. F.: Aphasia, Alexia, and Agraphia. Churchill Livingstone, New York, 213 pp., 1979.

ボストン大学医学部の神経学教授で，BVAMC の神経行動学センター長である Dr. Benson の筆になる本書は，一言でいうならば，簡潔で明解な，もっとも新しい知見を含んだ，ヒトの大脳機能障害（cerebral dysfunction）——とくに symbolic language の障害（失語症，失読症，失書症など）——についての労作である．1世紀以上にわたるこの領域の研究史をふまえ，多数の文献を駆使しつつ，批判的に概観し，さらに著者の見解も盛ったところに本書の価値があろう．

おもな内容は次のようになっている．

Ⅰ．背　景

1．序，2．史的背景，3．失語症の神経病理学的基盤，4．失語症検査法，5．失語の病巣の局在．

Ⅱ．失語症の症候学

6．失語の分類，7．シルヴィウス溝周辺（失語症）症状群，8．境界域症状群，9．皮質下症状群，10．全般性の症状群，11．失読症，12．失書症，13．随伴する症状群と補遺．

Ⅲ．言語の諸機能と神経解剖学的相関

14．言語の機能一側化，15．言語機能の局在，16．随伴する神経行動学的問題，17．失語症の精神医学的側面，18．失語症のリハビリテーション．

臨床神経学に携わる人々を対象に書かれたものだけに，著者もいうとおり，言語機能に関する心理学的，言語学的，形態学的側面についてはふれられていない．

それぞれの内容を逐次紹介することは避け，ここでは評者が興味をもった2・3の点について述べることにしたい．

くり返して著者 Benson が述べていることの1つ2つに，①術語（専門的な概念）を総括広義に（broadに）用いることをいましめ，②注意深く患者のあらわしている臨床症状を観察せよということがある．

前者①の例に 'apraxia'（失行症（状））がある．著者はこの術語の神経学における誤用を指摘し，とくに，この clinical entity の確立者である Liepmann が言語の apraxia の臨床所見について何も記載していないにも拘らず，後年，言語病理学者によってこの術語が広く用いられてしまったために，一層混乱が生じたと厳しく批判している．'apraxia of speech' は厳密には，構音の一貫した欠陥ではなく，随意的にはしばしばすべての音素（phonemes）は正しく産生されるが，特別な言語反応を要求される場面で，音素の誤用がおこる——しかし一貫性はない——ものをいい，失語症が 'language' の障害であるのに対してこれは真の 'speech' の障害であり，典型はまれであるという．language に問題がなくて明瞭に発語できない型をも 'apraxia of speech' に入れる立場もあるが，著者によればこれは著者の主張する 'aphemia' に該当するのだという．しかし，

解剖学的に失語症症状群を7つに分類する立場をとる著者であるが，この 'aphemia'（pure motor aphasia ほかと同義）の病巣が，Broca 失語のそれと overlap するという知見をもとに，随伴症状群の1つとして本症をとり出すには説得力に欠ける．従来用いられている pure motor aphasia を称したところで，やはり，臨床症状が主であり，そのことは，失語症の分類論を整理したようで再び，古典的分類と異ならないことになろうし，別の観点からの分類を否定することにはなるまい．最新の知見を考慮に入れてもまだ，著者もいうように '----is the terminology, not the syndromes,------and is the source of most of the confusion.' である．'apraxia of speech' と 'aphemia' とは論争の最中である．

もう1つの②の例は本書の方々に記載してある．いちいちもっともである．評者が日常臨床で時々経験する（器質脳疾患症例の）神経学的症状の中に，眼球運動障害の問題がある．著者によれば，発症初期の失語症にしばしば眼の共役運動（conjugate eye movement）の困難が認められ（Brodmann の領野8がその責任病巣），しかし多くは一過性であり，むしろ注視麻痺が持続すると，以後の回復へのマイナスの指標となろうという．よくみると右側への注視の減弱があって，これが読字能力に影響を及ぼしていることがあるという指摘などはさすがである．

慢性期の脳血管障害の中にも，時に gaze nystagmus, gaze paresis を示す症例があるが，この場合，eye convergency が不良で，head-eye- comovement を示し，かつ，側方注視時に saccadic movement を呈することが多い．このような例ではしばしば brain dysfunctic は広範で，重度のようである．この点についてのコメントがほしいと思うが欲ばりか．

言語の半球優位側判定に関する dichotic listening テストの評価が本書では意外に低く，また，近時わが国で話題をよんでいる角田の電鍵打叩による方法にはふれていない．後者は時期的に本書に間にあったかという点もあり，ともかく，前者についてはもっとていねいに述べるべきであろう．さらに，失読症と失書症に関しては，古くからわが国では，井村[1]，浅山[2]を中心とするすぐれた '失語症における漢字・仮名問題' への貢献があるのだが，それらが国際語で書かれていなかったために，本書 'でも'（'では' でなく），1971年と1975年の2氏の論文だけが引用され，'近年' syllabic な仮名と ideographic な漢字の差について知見が得られたとしている．古いが，しかし十分観察検索されたわが国先達のこれらの成果が国内のみにとどまっていたために，国際的に，歴史的に歪曲されているとすると残念である．

そのほか，たとえば palilalia の項に，本態性のものと症候性のものとを区別せずに症候性のもののみ記述したりしてある．しかしこれらは枝葉末節であり，本書の価値に影響しない．

例えば以上のようないくつかの問題点はあるにしろ，本書はそれを越えてはるかに，今日的で，簡明で，絵や写真も多く，1冊で広い関連領域をカバーした，すぐれた臨床神経学のモノグラフである．何より本書の魅力は，随所にみられる著者の批判的分析や主張と，この領域全般の概説をかねそなえていることである．大脳病理学，臨床神経学，リハビリテーション医学，言語障害治療学などの関係者，そのほか関心のある方々にとって必読の書の1つと思う．

参考文献

1) 井村恒郎：失語——日本語に於ける特性1——，精神経誌，47; 196, 1943.
2) 浅山忠愛：邦人ニ於ケル失語症ニ就テ，神経学雑誌，11; 473, 1912.